

カラヴァッジョ展



聖書を読む時に、聖書を題材にした傑作を眺めるのは楽しいです。想像を広げて、情景を思い描き、そこに描かれている姿から、聖書を味わうことがあります。カラヴァッジョの「キリストの埋葬」は、聖書の記述とは違い、弟子たちや女性たちが遺体に触れています。けれども彼らのイエス様を失った喪失感の大きさ、愛と悲しみが描かれていて、私はこの絵が

気に入っています。全体は光と影のコントラストが明瞭で、しかも実に生々しく写實的に描かれています。一方、「聖トマスの懐疑」の絵を見て、信じられない思いになりました。トマスが弟子達



に「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(ヨハ 20:25)と言った絶望の言葉が、このような「疑惑の解明」的な構図になるでしょうか。カラヴァッジョは人間の外面を美しく描くのではなく、欲望、醜悪さ、弱さを持つ悲しい内面をこそ、描きたかったのでしょうか。

先日上野の国立西洋美術館でカラヴァッジョ展を鑑賞することができました。夕方の比較的混雑のない時間帯だったと思いますが、それでも、カラヴァッジョを愛する多くのファンが詰めかけ、熱心に一点、一点を見つめて、静かな感動に浸っている様子を感じられました。カラヴァッジョ展



は、2014年に真筆と認められた、世界初公開の「恍惚のマグダラのマリア」が呼び物でした。マグダラのマリアは悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア(ルカ8:2)と聖書は記しています。カトリック

では女性蔑視の歴史があり、娼婦、遊女のように描いてきました。けれども、実際は、復活のイエス様に最初に出会い、それを証言し、愛と奉仕に生きた女性です。この絵は生きながら死んでいるような状態から、生きようとする力を与えられ、全身で受け止めようとしているマリアの姿を描いているように見えました。それはカラヴァッジョが死刑を恐れて逃げ回り、恩赦を求めた姿と重なって見えました。確かな死と、命への希望の光が絵の中に収められています。晩年に描かれた「エマオの晩餐」は静かなキリストと、そこからの光に照らされて、食卓についている貧しい人間たちが描かれています。「エック・ホモ(この人を見よ)」は、捕縛されて無力なキリストが柔和で静かに光を受けて立っているのに対し、陰、闇の中にいて、殺す側に立っている人間たちが強い対照を持って描かれています。カラヴァッジョは絵の中に登場する醜悪な人間の姿に、自分を投影させ、キリストから、招かれることを願ったように思えてなりません。素晴らしい作品を堪能できました。

